

氏名(本籍地)	島 映子(東京都)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	甲第77号		
学位授与年月日	平成29年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第1項該当		
論文題目	日本語の事態把握と話者による「ハ/ガ」の選択 —注視点・視座と文機能の検討から—		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学教授	金子 朝子
	(副査)	昭和女子大学教授	小川 喜正
		昭和女子大学教授	横山 紀子
		東京大学名誉教授	池上 嘉彦
		目白大学教授	久保田 美子

論文要旨

日本語の「ハ」と「ガ」は、主語を提示するという構文上重要な機能を持っているにもかかわらず、その使い分けの原理には未だ定説がない。これはこの二つの助詞が、「ハ」は係助詞、「ガ」は格助詞という異なるタイプに属し、実際の運用場面では「ハ」か「ガ」かという選択を迫られるのだが、機能的に「ハ」はこうで「ガ」はこう、と二分しにくいことによる。

そこでこれまでの「ハ/ガ」の研究は、主格「ガ」の文を「ハ」という係助詞で取り立てた文が「Nハ」の文になる、という「Nハ＝主題提示」の見方に立ったものがほとんどであった。しかし、「ハ/ガ」の使い分けに関しては、「Nハによる主題取り立て」という見方では解決されない、(i) 文章・談話の結束性を作る「ハ」と一文内で主題を示す「ハ」の関係、(ii) 「～ハ～ガ文」とは、(iii) 一人称・三人称と「ハ/ガ」の使い分け、(iv) <主題のハ>と<対比のハ>、<中立叙述ガ>と<解答提示ガ>の関係、などの問題が残されている。そこで本研究は、「Nハによる主題取り立て」という見方をやめ、「ハ/ガ」を共に主名詞(述部と最も緊密な関係を持ち、述部とともに文の骨格をなす名詞)として、これらの4点の問題を検討した。

また、日本語学習者が特に運用面で「ハ/ガ」の使い分けに悩むことが多いのは、この使い分けが「この文には使用可、この文には使用不可」といった文法のルールよりも、「話者がどのように事態を捉えて言語化するか」という<事態把握>の現れという面が強いからである。そこで本研究は、話者が「どのように事態を捉えている」ときに「～は」と発話し、「どのように事態を捉えている」とき「～が」と発話するのか、という「事態把握とハ/ガの関係」を注視点・視座の観点から考察した。

その結果、「ハ/ガ」使用の根底にあるのは、外在するものが発話契機となって「(外在するもの)ガ」と名詞を提示するか、話者が自らの内在的発話契機によって何かを述べようとし

て持ち出すものを「〇〇ハ」と提示するかの違いである、との結論を得た。それは別の言葉で言えば、事態時の話者の注視点を示すのが「ガ」であり、表現時の話者の視座を示すのが「ハ」であるということとなる。

「ガ」で示される注視点は話者がソトの世界のこととして知覚していることであり、それを文に表した時、三人称として表現されるということである。同じ出来事でも話者自身の体験は回想として、したがって内省的作用によるものとして、「私ハ」のように「ハ」で提示される。これが人称による「ハ/ガ」の使い分けとして現れるのであり、問題 (iii) への解答となる。

日本語の文表現は、ソトに知覚される「三人称主体ガ」の文、話者自身の体験や意志をウチのこととして回想・想像する「一人称ハ」の文、話者の認識を述べる「主題ハ」の文、ソト世界の出来事を話者との直接的関係に触れず単なるコト（一つの名詞相当の概念）として提示する「〇〇ガ」の文、に大別され、本稿はそれぞれ<知覚表明文><回想・意志表明文><認識表明文><非眼前情報伝達文>と呼んだ。これら4種の機能文型は以下のようにそれぞれ異なる注視点・視座を示し、話者にとって知覚、回想・意思、認識、非眼前情報のうちのどれを表現する文であるかを示す。

- <知覚表明文> : 事態時注視点・事態時視座 富士山が見える。
<回想・意志表明文> : 事態時注視点・表現時視座 私は駅へと急いだ。
<認識表明文> : 表現時視座 この夏は暑いね。
(任意に持ち出される題目のみで特定の注視点はない)
<非眼前情報伝達文> : 事態時注視点 (特定の視座に依らない)
富士山に初雪が降った。

聞き手が話者の視座に身を置き、想像上で話者と同じことを同じように体験することで理解を成立させる日本語においては、この「何を（注視点）どこから（視座）見て、どのように（知覚としてか、認識としてか）語る文であるか」の理解が欠かせない。「ハ/ガ」がここで重要な働きをしているのである。

本稿は、主名詞という原理的に一文に一つの述語と最も深い関係にある名詞を設定することで、従来の主語・主題をめぐる論争を回避するだけでなく、それによって、いわゆる「～ハ～ガ文」にハ主名詞文とガ主名詞文があることや、主名詞になりやすさが<解答提示 ガ>→<主題提示 ハ>→<対比 ハ>→<中立叙述 ガ>の順であることを明らかにした。

また、従来既知・未知などと混乱のあった新情報・旧情報という見方を捨て、前提（一文内に限らない）・焦点という概念を使うことで、「ハ/ガ」の入れ替えが前提・焦点の入れ替えとなり、取り立て表現を形作ることを示した。すなわち従来ただ並列的に挙げられてきた「ハ/ガ」の4用法は、「主題提示」と「中立叙述」が無標の形であり、「解答提示」と「対比」はその「ハ/ガ」が入れ替わった有標の「指定取り立て」と「対比取り立て」であり、おそらくそれは古語の「Φ・ハ」無標と「ゾ・コソ」有標を引き継いだものであると見られ、これが、

問題 (iv) への解答である。

さらに、「～ハ～ガ」文と言われる「ハ/ガ」両方を持つ文は、古くから「吉野の宮は山高み雲^ぞたなびく (『万葉集』1005)」「とも岡^は、笹の生ひたる^がをかきなり。(『枕草子』232)」のような形で存在したもので、日本語文としては、むしろ基本的な形であると考えた。その場合、題目すなわち「ハ」で示される「認識・説明対象」と「ガ」で提示される「動作主・状態主」が同じものである場合と異なるものである場合があり、同じものである場合、「認識・説明対象」として「ハ」で提示するか、「動作主・状態主」として「ガ」で提示するかを話者が選択することになる。異なるものである場合、両方を述べれば「～ハ～ガ」になるが、状況や文脈の中で前提・説明対象(「～は」)が明らかな場合は、それは発話されず「ガ」になる。状況の中に前提がある場合<知覚表明文>、文脈の中に前提がある場合<非眼前情報伝達文>、述部に前提の一部がある場合「N ガ」のみが焦点の「解答提示」「ガ」文となるのである。これが問題 (ii) への解答である。

従来「語りのハ」とか文の結束性を作る「関連の主題」とか言われた「ハ」の用法も、「ハ」の機能を「発話契機の内在」と見ることで、話者の側では同じ発想・メカニズムで使われていることも示した。これが、問題 (i) への解答である。

以上、本論文は、日本語話者が、「ハ」が発話契機の内在を、「ガ」が発話契機の外在を示す」という日本語社会に於ける表現の規則を基盤にして、(1) 知覚として述べるか(→「ガ」)、(2) 認識として述べるか(→「ハ」)、(3) 前提・焦点構造(「～ハ～ガ」)で述べるか焦点だけ述べるか(「ガ」)、(4) 無標の形をとるか(<中立叙述「ガ」><主題提示「ハ」>)取り立て表現をとるか(<解答提示「ガ」><対比「ハ」>)、の選択をしていることを明らかにしたものである。

論文審査結果の要旨

日本語の「ハ」と「ガ」の使い分けについては、例えば「ハ」は旧情報、「ガ」は新情報を表す、または、「ハ」は判断文、「ガ」は現象文であるのように、多くの捉え方や論考がありながらも定説に至っているものはまだ無いと言って良い。本論文は、その日本語の「ハ」と「ガ」の使い分けの問題について、発話契機が内在するのか外在するのか、話者は「ハ」と「ガ」をどのように選択しているのかなどに関するさまざまな先行研究を調査し、共時的検証と通時的検証を通して、これまでには見られなかった認知言語学的な観点から解明しようと試みたものである。

この問題に答えるため、まず、文の述部と緊密な関係を持ち、述部とともに文の骨格となる主名詞を提示する助詞としての「ハ」と「ガ」の使い分けを検討することとし、また、「ハ」と「ガ」の使用の背景にある話者の事態把握がどのようなものであるのかについて検討することによって、「ハ」と「ガ」の使用の根底にある原理を明らかにすることとした。

著者は、日本語では、聞き手は、話者が物を見る視点と同じ所に身を置き、話者と同じこ

とを同じように想像上で体験することで、理解を成立させようとするため、何を(注視点)どこから(視座)見て、どのように知覚したり認識したりして語る文であるのか、つまり、話者の事態把握を理解することが重要となると考えるに至った。たとえば、夜空の月を眺めて、「月がでているな。明日はきっと晴れるだろう。」と言った場合、「月が出ている」の「ガ」は話者の注視点、「明日は」の「ハ」は、話者がイマ・ココという視座で話していることと理解できる。

論文の構成は、第1章の序論の後、第2章では先行研究をまとめ、第3章から第7章で筆者独自の理論構築を行っている。さらに第6章、7章でその理論を実証し、第8章でまとめと考察を行っている。

第8章では、以下のように結論づけている。

1. 一文内で使われる「ハ」も、談話・文章の結束生をつくる「ハ」も、話者にとっては発話契機の内在（自分の考えていることの中から題目を持ち出すこと）という同じメカニズムで使われている。
2. 話者がそれについて何かを述べようとする<認識対象>を前提として持ち出す「ハ」と話者が注目している事態内の点（注視点）を限定する「ガ」が重ならない場合は「～ハ～ガ」となる。
3. 三人称には「ガ」がつくのが無標、一人称には「ハ」がつくのが無標である。
4. <主題提示「ハ」>と<中立叙述「ガ」>は無標、<対比「ハ」>と<解答提示（指定）「ガ」>は前項焦点で、有標の取立て表現である。

以上のように、「ハ」と「ガ」の使い分けに関して、さらに明らかにすべき点も残されているものの、本論文はこれまでの数多くの理論を整理して、独自の論を組み立て、話者がどのように事態を捉えている場合に、「ハ」を用いるのか、または、「ガ」を用いるのかという使い分けの原理、つまり、「ハ」が発話契機の内在を、「ガ」が発話契機の外在を示す機能を持ち、話者はそれをふまえて、（1）知覚として述べれば「ガ」、認識として述べれば「ハ」、（2）前提・焦点構造で述べれば「～ハ～ガ」、焦点だけで述べれば「ガ」、（3）無標の形をとれば、中立叙述が「ガ」で主題提示が「ハ」、取立て表現をとれば、解答提示が「ガ」で対比が「ハ」、という選択を行っていることを示した点で高く評価できる。実証するデータの質並びに量、また、様々な概念や用語の解説などについては必ずしも十分とは言えない箇所も見られるが、日本語以外の言語にも「ハ」と「ガ」の対立に似たものがあるのか、話している内容に対する話し手の判断や感じ方を表す言語表現であるモダリティーとの関連はどのようになっているのかなど、今後のさらなる理論的発展の出発点となる論文として大いに期待できるものである。よって、審査委員会は全員一致で、申請者に対し、博士（文学）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。